博士論文 平成 28 (2016) 年度

相互行為としてのマルチモーダル・アクティビティ:
多重に絡みあう身体時空間資源の即興的利用

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科
坂井田 瑠衣

要約

相互行為とは，言語的やりとりだけを指すのではない．身振りや視線などの身体的やりとりも重要である．我々は無自覚的に，互いの身体を微細に観察し反応する．その過程を明らかにするには，相互行為の微視的分析が必要である．さらに，医療や調理などの身体を介した共同的な活動も，状況に埋め込まれた相互行為である．本論文の目的は，相互行為として展開される共同的活動において，いかに身体的・時間的・空間的資源を即興的に利用するかについて，(1) その構造的特徴を描き出し，(2) その過程を研究の俎上に載せるための枠組みを提示することである．そのために本論文では，歯科診療，協同調理，展示物解説場面を観察し，共同的活動における相互行為の過程を微視的に分析している．マルチモダリティ，参与構造，成員性という観点から，いかなる要因によって相互行為資源としての意味が見出されるのかを記述している．

1 章では，本論文が取り扱う問題の所在について説明している．会話以外の活動を展開するための「会話外行動」が個別具体的状況に埋め込まれて利用される共同的活動を「マルチモーダル・アクティビティ」と呼び，それは個別具体的な状況に埋め込まれた即興的な対応の連鎖によって展開することを論じている．その探究のために，「状況」を生み出す要因として，マルチモダリティ・参与構造・成員性に焦点化すべきことを主張している．

2 章では，本論文が採用する研究方法について説明している．相互行為という考え方について説明し，本論文の議論において用いる記述の枠組みや分析概念を概説している．その上で，本論文では相互行為分析という方法を用いつつも，性急な一般化を避け，状況に依存した個別事例における即興的対応を具に描くことの重要性を主張している．その後，本論文において採用する分析の方針，データ，トランスクリプトの概要を述べている．

3 章では，歯科診療場面における歯科医師と患者のやりとりにおいて，会話外行動が会話行動に埋め込まれることで，相互行為資源として用いられる過程を観察している．相互行為の状況に依存して動的に対応するための道具立てとして，歯科医師と患者双方の会話行動と会話外行動が複合的に使われることを示している．これにより，社会的場面にかかわりのある活動は，基本的に会話外行動を含んでマルチモーダルに組織される活動，すなわちマルチモーダル・アクティビティとして見るべきであることを主張している．

4 章と 5 章では，マルチモーダル・アクティビティの中でも，伝達意図を伴わない会話外行動および会話行動を手がかりに，共同作業が適切に連鎖するという，「暗黙的協同」の様相を明らかにしている．まず 4 章では，友人同士がもんじゃ焼きを協同で調理する場面を観察し，会話外行動による相互行為連鎖を観察している．各参与者の調理動作，すなわち，伝達意図を伴わない会話外行動の連鎖によって，調理工程が進行することを明らかにしている．このような，伝達意図を前提としない会話外行動によって共同作業を暗黙的に達成するという図式が存在することを示し，これを「暗黙的協同」として定式化している．

5 章では，歯科診療場面を観察し，前章で定式化した暗黙的協同について，特定の場面に依存した形態として，「傍参与的協同」という図式が見られることを示している．歯科診療場面の傍らに参与する歯科衛生士が，会話という観点からは傍参与者でありながらも，実際には歯科診療という制度的な要請に応じて，傍参与者以上の貢献を見せることを明らかにしている．ここでは，複数の活動の同時進行による多層的な参与構造が存在しており，この構造は会話行動のみを観察していては見逃されうるものの，歯科診療場面の相互行為においては極めて重要な機能を持った構造であることを示している．

6 章では，たとえある者の行動が他者への情報伝達意図を伴っていても，その投射性は相互行為の個別的状況に強く左右されることを示している．ここでの観察対象は，日本科学未来館の展示物解説場面において，展示物の解説者である科学コミュニケーターと来館者が，次に見るべき展示物へ向かって自ら歩き出すことで，来館者に追随を促し，来館者がそれに呼応して歩き出すというやりとりである．自ら歩き出すことによって他者の歩き出しを促すという，伝達意図を伴った会話外行動の投射性は，状況によって容易に変動しうるものであることを示唆する．

7 章では，話しかけたい相手の会話外行動を観察可能な資源として，「今話しかければ相手の反応を得られる」というタイミングを見極めること，すなわち「会話場」を形成するためのマルチモーダル・アクティビティを観察している．歯科衛生士が歯科医師に話しかけてよいタイミングを見極めるにあたって，歯科医師の当座の会話外行動による関与を観察し，首尾よく会話場を形成する過程を分析する．これにより，焦点の定まらない相互行為から焦点の定まった相互行為を開始する際，相手の会話外行動が利用され，相互行為の基盤が形成されることを示している．

8 章では，これまでの分析を俯瞰的に考察し，共同的活動を支える二つの構造的特徴を明らかにしている．まず，共同的活動においては，参与者の志向が複合的に表示／表出される．さらに，共同的活動には，多層的な利用可能性が生じる．これらの構造的特徴によって，複合的かつ多層的に，すなわち多重に絡みあう身体的・時間的・空間的資源が，即興的に利用されることを論じている．さらに，筆者自身が「相互行為を観る目」をいかにして体得した過程を記述し，相互行為研究の分析的知見をフィールドに還元することの有用性と課題について検討している．

9 章では，本論文の議論によって得られた知見をまとめている．